平成24年度 学校評価シート

評価の基準 A(設定した目標を十分達成できた) B(設定した目標に対し、ほぼ達成でき次年度の課題が明確になった)
C(設定した目標に対し、成果が不十分であり課題が残った) D(設定した目標に対し、ほとんど達成できなかった)

項目	昨年度の課題	本年度の目標	目標達成の手立て	自己評価	学校関係者評価 (児童生徒4名・保護者5名・ 病院関係者4名・教職員6名)	今後の課題や方向性			
平成24年度重点目標	1 重複障害のある子どもの学習づくりの推進	支援機器を活用しながら、具体的なコミュニケーションの手段としての文字や数字等の学習を計画的に進め、取組のまとめをする。	・ワンクリック教材の開発を継続させるとともに、コミュニケーションのツールとしてレッツ・チャットを授業の中で使用する。 ・専門家による所見を参考にし、レッツチャットで生活を豊かにするための手段となるような研究を行う。	・全員による授業研究を実施し、実態把握に関する話し合い(5回)を持つ。 ・関係機関(近隣の高等学校、大学)と連携してワンクリック教材を開発し、玩具の改造と支援機器を製作する。 ・専門家(特別支援教育総合研究所等)による所見を参考にし、教材の検討及び指導方法の研究を行う。	B	①新しいワンクリック教材の開発ができなかった。しかし、教材開発を試みる中、特総研の研究者や視覚の専門家のアドバイスを受けて、より児童の生活を豊かにすることができた。 ②新たな教材開発はできなかったが、レッツチャットで手紙を書くことによって、児童のコミュニケーションに関する意欲を高めることができた。	B	学校が他機関との連携をし、新しい教材開発に取り組んでいることは評価している。しかし、今できていることが確実にできるようにしてほしい。新しい教材づくりはそれからでも構わないのではないかと。	重複障害の子どもの授業は、成果や付けた力が定着しているかという評価の基準が難しい。しかし、他機関や専門家の助言を取り入れ、今後もふさわしい教材を見つけるなどしていきたい。
	2 特別支援教育におけるセンター的役割を果たす	発達障害に関する研修を行い、教員の専門性の向上にあたる。また、地域支援とあわせて、校内研修の案内などを発信する必要がある。	・南国市における特別支援教育に関するニーズの把握と支援 ・発達障害に関わる校内研修の充実	・県の事業等を紹介するなど、地域支援の充実をはかる。 ・校内での研修を実施し、教職員の資質向上を図る。またその研修等の案内をホームページ上で情報発信をする。	A	①校内研修、校外の任意の研修の成果を共有し、また、病院内外の医療関係者を招聘して積極的に推進し、病弱教育における専門性の向上に努めた。地域支援の推進にも取り組んだ。発達障害についての研修を三学期に予定している。 ②県の事業等で地域の保育所および小学校の教育相談員派遣事業を行った。	A	病弱特別支援学校としての専門性向上のための研修は前年度以上にできている。また南国市と連携し、教育相談員派遣事業を行ってきたことは評価できる。	要請を受けて派遣するだけでなく、こちらから発信し、センター的機能を充実させていく。そのためにはホームページの充実以外のものを探したり、それぞれ教員の専門性を磨く必要がある。
	3 教科以外の指導の充実	課外活動については、学部単位での取組を検討するなど内容の充実に向けさらなる工夫が必要である。また、実施可能な交流及び共同学習については長期的な見通しを持って、積極的、計画的に推進しなければならない。	・月1回、幅広い年齢の子どもたちを対象とした活動を行う。 ・月1回、運動等を取り入れた中学生を対象とした活動を教室にて行う。 ・ボランティア等を活用して、内容に広がりを持たせる。 ・実施可能なケースでの「交流及び共同学習」の計画的な実施 ・スクールプランニング事業を活用して、子どもたちが自分の将来について考えるきっかけとする。	・高学年を対象とした内容を検討し着手する。 ・ボランティアを活用して、活動の内容に広がりを持たせる。 ・病棟及び前籍校との共通理解、連携を密にし、「交流及び共同学習」について、実施可能なケースで計画的に実施する。	A	①課外活動として実施した演奏会では、ボランティアの協力を得て、児童生徒の心の安定を図ることができた。 ②前籍校と支援会議や居住地校交流を行うことによって、スムーズに前籍校に復帰することができた。 ③自立活動では、キャリア教育の一環として、職業人の仕事に対する情熱に触れ、自分の将来について考えることができた生徒もいた。	A	課外活動や自立活動に対しては児童生徒のためにできることを実行できている。キャリア教育の一環として行った講話は児童生徒に大きな影響を与えたと考えられる。また、支援会議や居住地校交流については、可能な限り開催することができた。	児童生徒の病状等により、課外活動や自立活動を計画的に実施することが難しい。今後も病棟と連携し、情報交換を進め、社会参加・自立できる人間の育成に努める。
その他の目標	児童生徒理解に努める			A	校内の教職員間・医療スタッフ・前籍校の教職員と情報交換し、実態把握をした。	A	よく児童生徒理解をしようと努めている。	児童生徒の抱える課題が病気によるストレスなのか、児童生徒の本来の性質によるものなのか不明なケースがある。今後、アンケートを取る時に、在籍期間とあわせて集計し、児童生徒理解がより詳しく分析できるように、調査していきたい。	
	保護者に安心や希望を与えることに努める			A	機会を見て声掛けをした。	A	保護者にとって児童生徒が学校に行けること・学校の存在が希望となっている。	児童生徒の病状の重い時に、保護者とどう向き合うかが課題である。今後も保護者の話をしっかり傾聴し、なお一層病棟と連携していく必要がある。	
	児童生徒にとってわかる授業を実施することに努める			B	教材研究をし、授業に生かしたが、個々のニーズに対応できなかった児童生徒がいた。	B	昨年度10人全ての児童生徒が肯定的評価をしたが、今年度は4人中3人が、児童生徒が肯定的評価をしていた。	同じ教科や学部の者同士で研究授業を行いにくい点がある。今後、テレビ会議システムを利用することや、発達障害に関する研究を行い、個々のニーズにあった授業を展開することを必要がある。	
その他								アンケートの中に、「少しそう思う」や「あまりそう思わない」という項目があり、そのあいまいな部分の原因は何か、聞きとることはできないだろうか。そこから分析や次の方針が生まれると思う。回答が書きにくい児童には面接などし、聞きとるのも考えられる。	